

【投 稿】

喜寿超え獣医師の回想(1)

岡 崎 充 成

(空知支部)

私は昭和19年12月24日生まれで、昭和44年3月に帯広畜産大学（帯畜大）を卒業した獣医師です。新卒で上川生産農業協同組合連合会（生産連）に入職し、美瑛町にある白金共同利用模範牧場（白金牧場）において3年半従事した後、道職員として旭川と由仁の保健所に合せて7年半務めました。昭和55年に福島県職員に割愛になり、郡山と会津若松の家畜保健衛生所に通算11年、畜産試験場に9年（内、沼尻支場7年）、養鶏試験場に5年務めた後、平成17年に退職しました。白金牧場での臨床経験の不完全燃焼感から、郡山市内で産業動物診療所を開業し、11年間にわたり牛と時々馬の診療に従事しました。それぞれの職場における今でも記憶に残るできごとを紹介します。

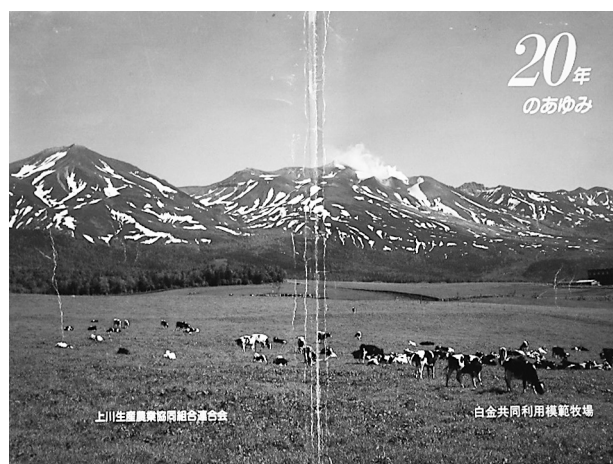
1. 白金牧場（3年半）

牧場は十勝岳の山麓、標高700 mに位置し、夏は風光明媚だが、冬は豪雪・強風の厳しい所でした。社会人1年生の昭和44年から3年半の従事でしたが、私にとっては10年以上に匹敵するものになっています。その中からいくつかを回想してみたいと思います。

(1) 餌不足による死亡牛多発

6～10カ月齢のホルスタイン雌を導入して、夏期は約800頭、冬期は600頭を飼養し、初妊牛にして販売することが主たる業務でした。赴任して早々、この牛達の「死亡多発」に遭遇しました。原因はヘイレージ（これは約60%に乾燥させた牧草を約1 cmに細断し、真空気密サイロで調整したサイレージ）を完全飼料（刈遅れ牧草もあり、今考えると不完全飼料）と考え、寒冷・運動等のエネルギーロスを全く無視した、机上の飼料計算が原因でした。多分必要量の60～70%の給与量だったと思います。給餌が終わっても、餌を催促して「モーモー」と鳴いていました。弱い牛は食い負けて、栄養失調でかなり死んでいきました。ひどいもので、フラフラしている牛に、どんな治療をしても全然効果がないものです。点滴最中に死んだ牛もありました。

翌年は稲ワラと米ヌカを補給し、次の給餌まで、飼料（ワラ）が少し残るぐらいに増量して給与しました。給



筆者が在籍した白金共同利用模範牧場
初夏は風光明媚、右端は牛舎と真空気密サイロ

餌後には餌の催促はなくなり、雪の上（雪の上は案外温かい、氷の上は駄目）に横臥して反芻する牛が多く、死亡牛は極端に減少しました。3年目には廃用・死亡合わせて年間10頭以下になったように記憶しています。この経験から、机上の畜産の恐ろしさと、飼養衛生の問題は、経営全般のなかに整合性をもって位置付けなければ、足腰の強い畜産にはならないことを、痛切に教えられました。以後の獣医・畜産に携わった時は、「飼養衛生、特に餌」の問題を一番先に考えるようになりました。

(2) 高泌乳牛の繁殖障害と代謝器病

管内乳牛の改良の目的で、30頭の輸入牛が導入されていました。体格、得点、乳量もかなり高く、乳量が全国1位になった牛もいて、関係者の注目を集めたのですが、問題は繁殖障害と代謝器病でした。繁殖障害の原因は蛋白質の過剰給与でした。混播のグラスヘイレージと高蛋白質の配合飼料でしたが、高泌乳牛だからと、それに加えて魚粉を混ぜた餌を給与していました。これでは繁殖成績が良いはずがありません。帯畜大の小野 斉先生にTDNを確保していれば、DCPは高くても良いという指導を受け、場内大激論の末に次のような改善をしました。①魚粉の給与を中止、②配合飼料に挽き割りエン麦を混ぜて、TDNの上昇とDCPの下降を図る。加えて、③粗飼料はヘイレージの単味給与から、夜は乾草を長いまま給与することにしました。当時、ヘイレージは発酵飼料なので、ある種の栄養素が分解していると思っていたのですが、今考えると発酵飼料の問題ではなく、消化管刺激作用が少ない、細断ヘイレージが問題であったと思います。夜、乾草が飼槽にあることは、3時間おきの採食・反芻が、ルーメンPHを良好に保つという、牛の生理的特性にもマッチしていたようです。これらの飼料給与の

改善で、面白いように受胎したことは、今でも忘れることはできません。

代謝器病ですが、①ケトージス、②乳熱が問題で、乳期ごとにほぼ全頭が罹ったように記憶しています。①ケトージスの原因は、前述のような「飼料給与のアンバランス」と「細断ヘイレージによるルーメン機能の低下」が根底にあったように思います。飼料給与の改善でかなり減少しました。②乳熱については、今では分娩前約半月のCa剤の給与中止（骨・血液間のCa調整機能活性化のため）は、定着していると思いますが（アメリカ等では、通常の飼料よりもCa含量の少ない、乳熱予防のための特別飼料が開発されているという）、当時は酪農学園大学の高橋清志先生が学会で発表されたのが最初くらいで、一般的ではなかったのです。多発していたので、応用しようと提案しましたが、「胎子がいるのだから、むしろCa剤は多く給与すべきだ」との意見に押され、実行に移せなかったのは今でも残念に思っています。

(3) 捕獲設備がなく人工授精に苦労

初妊牛にしての販売が命題なのに、牧場に捕獲設備がなかったのです。人工授精（AI）のために、最初投げ縄を試みましたが、数時間掛かって1頭を捕獲しました。しかし、牛群は学習したのと恐怖心が加わって、人が近づけば一斉に逃げ出す始末、やむなく投げ縄は止めました。改善は、AI牛群を牛舎近くの牧区に移動し、約4人で牛舎まで牛を誘導することにしましたが、時間が掛かったり、半数しか収容できないこともありました。効率の悪い方法で2～3カ月経過した頃、発情発現時の乗駕グループは、人の誘導に従順なのを発見し、この時に牛舎に収容して、約半日後にAIを実施することにしました。この方法により、発情監視→捕獲→AIの一連の作業は、ほとんど私と人工授精師の2人で完結できたので、省力的で小回りが効くようになりました。

(4) 全体の繁殖成績

前述の、①育成牛の冬期間エサ不足、②適時捕獲困難、③高泌乳牛の超高蛋白飼料による繁殖障害等から、初年度の繁殖成績は、1回換算受胎率が20%以下であったと思っています。当時、生産連は凍結精液の野外実用化を先進的に取り組んでおり技術者のレベルが高く、繁殖成績は良かったので、白金牧場の1回換算受胎率20%以下は、生産連の評価を落とすことになるから頑張れと、お叱り・励ましを随分受けたものです。翌年からの、餌の改善と適時捕獲してのAIなどで、2年目は40%台、3年目でようやく50%以上の1回換算受胎率になった時は、公共牧場の成績としては「まずまず」と、人工授精師さ

んと祝杯をあげたことを、昨日のこのように思い出されます。

育成牛は妊娠させなければ売れなという重圧が常にあり、①2回再発情牛は種牛を変える、②排卵するまで朝夕AI（1発情で最高7回のAI）、③子宮洗浄、④10回以上のAI等々を試みた結果などにより、3年半で不妊廃用は5頭以下に抑えることができ、総受胎率は99%以上だったと思っています。

白金牧場での3年半は、一生の宝になる貴重な経験をさせていただきました。若さの至りで、突っ走ることも多かったのですが、それをやらせてもらえる、雅量のあるところであったと感謝しています。

獣医師募集

施設名：北海道檜山家畜保健衛生所
勤務地：〒043-0023
檜山郡江差町字田沢町281-1
求人数：1名（育児休業職員の代替職員）
採用条件：獣医師免許／普通自動車運転免許
雇用形態：臨時的任用職員（臨時獣医師）
雇用期間：令和5年10月25日まで（予定）
業務内容：家畜衛生業務（家畜伝染病予防検査、家畜衛生指導、病性鑑定等）
勤務時間：8：40～17：30（うち休憩時間60分）
休日：土日祝日、年末年始（12／29～1／3）
休暇：年次有給休暇20日以内／年（任用月数により計算）、病気休暇、忌引休暇等
待遇：給与月額：210,500円（月額）
＊職務経験等により個人別に算定
手当：通勤、住居、扶養、寒冷地手当等
＊支給要件に応じ支給
賞与：勤務期間や勤務成績に応じて支給（在職期間が短い場合、支給されない場合があります）
保険等：健康保険、厚生年金、雇用保険等
選考：書類選考、面接試験
※選考申込時は、事前連絡（電話）の上、写真を貼付した履歴書を当所へ送付して下さい。
連絡先：北海道檜山家畜保健衛生所（担当：北本）
TEL 0139-52-0707
FAX 0139-52-4226
E-mail：kitamoto.hiroaki@pref.hokkaido.lg.jp